

西隆寺跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

西隆寺は、称徳天皇御願の寺として神護景雲年間に平城京1条2坊9・10・15・16の坪に造営された。しかし平安時代に入りしだいに衰退して西大寺に摂領され、平安末頃までに伽藍地は田畑と化し荒廃している。伽藍配置については、西大寺往古敷地図にみえ、4つの坪の中央に「金堂」、10の坪に「塔」、10の坪と15の坪との中間に「南大門」が描かれている。この配置の真偽についてはなお検討すべき問題もあるが、調査結果よりみてほぼ誤りのないものと考えられる。

寺域にあたる近畿日本鉄道西大寺駅北口周辺は、近時ショッピングセンターや銀行の進出が相次ぎ、開発による破壊が急速におこなわれつつある。平城宮跡発掘調査部は、1971年度におこなわれた東門跡の調査にひき続き、本年度も奈良県教育委員会の要請をうけ塔跡、金堂跡の発掘調査をおこなった。

塔跡の調査は1971年7月7日から7月29日まで実施し6.3aを、金堂跡は1971年12月10日から1972年2月19日にわたり、12aについて発掘をおこなった。

塔跡 塔跡S B050は発掘区中央西寄りにあり、基壇掘り込み地業が検出できた。掘り込み地業は、一辺約6mのほぼ方形で、南辺と北辺に僅かな張出しがある。深さは現状で約0.7m、内部には砂・粘土・瓦片・大型の礫などを混えて積み上げた数層がみられた。基壇化粧は全く残存していない。

塔跡の南約7mの位置に幅約0.7mの東西溝S D062がある。溝の南には、部分的に黄灰色粘質土の高まりがあり、この溝を北雨落溝とする東西築地の存在も考えられる。

建物S B040は、塔跡の北にあり、桁行4間以上、梁行3間以上の東西棟で、南面に廂を付した建物である。この建物は塔よりも古いことが知られた。

発掘区中央東端にある井戸S E060は、楕円形の掘りかたで深さ2.4mある。井戸枠は、縦板2段組で4段の横桟で支えられている。井戸内部から奈良時代初期の横瓶が出土している。位置関係から掘立柱建物と同一時期であろう。この井戸の南に円形掘りかたをもつ井戸がある。深さ約1mをはかり、底部中央に縦板を組んだ井戸枠が残っていた。

発掘区北西部に2条の溝がある。蛇行する溝S D044には、弥生式土器、古墳時代土師器、埴輪片を伴う。鍵の手に曲がる溝S D045は、前者の溝に切り込まれ、共に古墳時代の溝である。

塔跡の掘り込み地業に重複して古い土壌3基、新しい土壌1基がある。発掘区南半の楕円形土壌からは、古墳時代の土師器が出土した。

第1図 塔跡遺構実測図 出土遺物には、土器類の他に埴仏・砥石・瓦がある。軒丸瓦は17点

あり6127形式が多く、軒平瓦は1点も出土していない。

金堂跡 調査によって検出した遺構は、西隆寺金堂と、西隆寺造営以前の各種の遺構―掘立柱建物5棟、井戸4基、溝5条、道路1条、池などがある。西隆寺金堂S B100は、床土直下に認められ、後世の削平で基壇土を失っていたが、凝灰岩石列および溝状の

第2図 金堂跡遺構実測図

抜きとり痕跡から創建時の基壇規模を知ることができた。この凝灰岩石列は、基壇東南隅と西辺部に比較的良く残っており、幅0.6m、深さ0.1mの溝状掘りかたの中に据えられていた。凝灰岩石列は、一石の長さ97cm、幅27cm前後をはかり、基壇地覆石と考えられる。金堂基壇は、東西38.15m(127尺)、南北23.60m(79尺)をはかる。正面に幅15.9m、背面に幅7.6mの階段がつき階段の出は共に1.5mである。なお東西側面の階段の有無については確認できなかった。基壇築成に際して掘り込み地業はおこなわれていない。基壇外方には、明確な雨落溝は認められず、バラスや瓦敷面が広がっていた。金堂建物については、階段規模や基壇規模などから7間×4間の建物で、桁行31.5m(105尺)、梁行16.8m(56尺)と復原できよう。

講堂、中門、回廊を検出すべく、トレンチを3か所設定した。講堂トレンチは、金堂北側24mの位置に設定したが遺構は認められず、講堂は更に北方の民家の下に存在するようである。中門トレンチは、金堂南側30mの位置に設定した。トレンチ南端部で径1.7m、深さ0.4mの楕円形掘りかたを検出したが、中門を示す顕著な遺構はみられなかった。回廊トレンチは金堂東方22mまで伸ばしたが、回廊は認められず、大小のピットを検出したにとどまった。このうちトレンチ中央北端の径4.5mの土壌S K070には、瓦が多数投棄されていた。

西隆寺金堂の下には、造営以前～奈良時代前半の遺構が多数存在する。遺構には、道路、溝、掘立柱建物、井戸、池などがある。

発掘区中央には西側を溝で区画された南北に走る道路S X105がある。路面幅は5mで東側に幅0.9m(S D095A)、西側に0.7m(S D110A)の側溝をもつ。後に側溝は東側2.5m(S D095B)、西側3.0m(S D110B)に幅を拡げている。

道路の東西を画する築地の痕跡は検出できず、その位置には井戸や柱穴がみられた。

この道路の中軸線は、西隆寺金堂中軸線と一致し、遺京1条2坊10坪と15坪の間を通る小路と考えることはできる。しかし他方にはこの推定に否

定的な考え方もある。道路の中心軸線と平城宮朱雀門軸線との距離は939.65m (3100.845現尺) をはかり、小路と考えると、朱雀門からの想定距離は3140尺となる。したがって、造営尺は11尺1尺に対して0.98753尺となっており、これは通常考える造営尺よりも大きく、一概に検出した道路を小路と決することはできないとする考え方である。今この道路が小路なのか否かについては速断できず更に今後の検討が必要である。

建物は5棟ありすべて掘立柱建物である。道路の東側には井戸覆屋と思われる1間×1間(2.4m×2.4m)の建物S B085とその北方に2間×1間(5.1m×3.0m)建物方向が真北に対し西に振れた建物S B150がある。また道路の西側には3棟の建物がある。最も南の東西棟S B120が大きく、2間×4間(5.1m×8.4m)の規模をもつ。この建物の北には、2間×3間(3.9m×4.5m)の東西棟S B125があり、柱穴の重複から前者よりも新しいことが知られた。道路西側溝が拡張されるに伴って規模を小さくして建てかえられたものであろう。この建物の北側には建物方向を真北に対し東に振った2間×3間(1.8m×3.9m)の建物S B135がある。その他、大小の穴が無数に存在したが、建物にはまとまらなかった。

第3図 木簡
(1:2)

発掘区中央にはほぼ東西に一列にならんで4基の井戸を検出した。最も東にある井戸S E075は、畦畔下にあるため掘りかた上面を検出したにとどまり、他の3基を全掘した。東の井戸S E080は、径2.8mの円形掘りかたをもち、内部に横組の井戸枠2段が残っていた。遺物は木簡1点と土器・木器が出土した。木簡などの遺物からみて西隆寺造営時に埋められたものである。中央の井戸S E090は、すでに枠木を抜き取られ、抜き穴から土器・木器が出土した。天平年間に埋められたものである。西の井戸S E130は、一辺2.2mの隅丸方形の掘りかたで深さ2mある。井戸枠は横組で6段分が残り、枠板の組み方は仕口を相欠きにした特異なものである。内部からは須恵器大甕や井戸のつるべに用いた土師器甕などが出土した。これらから埋められた時期は天平末年頃と推定できる。この井戸の水は、西方にある池に流れ込む。

池S G140は、南北9m、東西3.5m以上、深さ0.3mあって、西半部は発掘区外に広がる池の水は、池東南隅から溝を通り小路西側溝に流れ出る。溝と東西棟建物とは重複があり、溝の方が新しい。

遺物には、木簡・瓦・土器・木器がある。木簡は、1点のみで「寺浄麻呂 船」と読める。軒瓦は52点ある。咩瓦は17点あって6235形式が多く、軒平瓦は33点で6761、6775形式が多い。いずれも奈良時代後半の瓦である。他に鬼瓦が2点ある。土器は発掘区全域から出土するが、特に溝、井戸からの出土が多い。时期的には西隆寺造営以前の奈良時代前半の土器が多く、西隆寺以降のものは少ない。木器には篩、削りかけ(齧申)などが井戸内部から出土している。他に和銅開珎がある。

(黒崎 直)